

図書館だより

Library News No.80

National Institute of Technology (KOSEN) , Nara College

2023年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙絵は1I 永濱 生桐 さん (左上)、1E西山 龍之亮さん (右上)
1E前田 沙耶花さん (左下)、1C森垣 なずなさん (右下) の作品

目 次

巻頭言	2
クラス・個人多読・読書感想文コンクール表彰について	3
読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文コンクール入賞作品	6
学生図書委員会 活動報告ほか	10
図書委員厳選おすすめ図書紹介	12

巻頭言

「数学が好きなら、化学をやれ」「応用をやるなら、基礎をやれ」

物質化学工学科 松浦幸仁

奈良高専が立地する大和郡山市に縁がある二人の化学者の話を申し上げたいと思います。上記「数学が好きなら、化学をやれ」は、明治16年に平群郡平端村（現、大和郡山市額田部南町）に生まれ、旧制郡山中学校を卒業後、東京帝国大学助教授を経て京都帝国大学教授に就任され、退官後に浪速大学（現、大阪府立大学）初代学長を務められた喜多源逸博士の言葉です。そして、この言葉を聞かれたのは、当時大阪高等学校の生徒で後に京都大学工学部教授に就任し、日本人として初めてノーベル化学賞を受賞することになる福井謙一先生です。福井先生の父上は大和郡山市井戸野町のご出身であり、福井先生も奈良で出生された後に、大阪で高等学校までお過ごしになりました。

福井先生が京都帝国大学のどの学部に進学すべきか迷っていた際に、数学が得意だったこともあり、その方面への進学も考えておられました。ところが、福井家と喜多家は縁戚関係にあり、福井先生の父上が喜多博士に進学についてご相談されたところ上記の意外な言葉を頂き、それが縁で福井先生は応用化学に進学されました。その後、福井先生は喜多博士のもとで応用化学の研究をすることになるのですが、その際に「応用をやるなら、基礎をやれ」という言葉も頂いています。当時、化学の分野は実験重視で、純粹に理屈で攻めるといような風潮はあまりなかったようなのですが、化学も理屈で分かるようになるとの見通しを喜多博士が立てておられたのです。

喜多博士の助言もあり、福井先生は理学部物理学教室の図書室に足しげく通われて、勃興期にあった量子力学を精力的に勉強されます。当時は戦時中・終戦直後でコンピュータもなく、量子力学を複雑な分子に適用することは至難の業だったのですが、やがて大学に大型計算機が導入され、分子軌道法による計算手法も確立されるようになると、複雑な分子の電子状態を計算できるようになりました。福井先生は量子力学の知識を基に電子の軌道の概念を化学反応に適用することで、フロンティア軌道理論に結実させて、ノーベル化学賞を受賞するに至りました。

喜多博士が考えられておられたように、密かに基礎の勉強をしておけば、それがどこかで結びつくときにサイエンスや工学の分野で大きなインパクトをもたらします。また、福井先生は、「学問をやるには、どこに結びつくかわからないような基礎的な分野を、こまめに着実に培養しておかなければならない。」と述べられています。もし、喜多博士が今の時世を見られたら、「数学が好きなら、生物（バイオ）をやれ」とでもアドバイスされたでしょうか。お二人の先生方に縁のある大和郡山市に立地する奈良高専には、幸いなことに立派な図書館があり、専門書を多数所蔵しています。学生の皆さんは足しげく図書館に通われて、ぜひ基礎を育んで頂きたいと思います。

上記の経緯がまとめられた書籍が奈良高専図書館に所蔵されています。最後に、下記にご紹介したいと思います。

学問の創造 / 福井謙一[著] (佼成出版社、1984年)

化学と私：ノーベル賞科学者福井謙一 / 福井謙一[著]；山邊時雄[編] (化学同人、1999年)

ノーベル賞の周辺：福井謙一博士と京都大学の自由な学風 / 米澤貞次郎, 永田親義[著] (化学同人、1999年)

クラス・個人多読・ 読書感想文コンクール表彰について

【クラス多読表彰】

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



第1位	物質化学工学科3年	(14冊/人)
第2位	システム創成工学専攻 情報システムコース2年	(12冊/人)
第3位	物質化学工学科4年	(11冊/人)
第4位	機械工学科5年	(9冊/人)
第4位	電気工学科5年	(9冊/人)

【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	電子制御工学科1年	藤田真吾さん	第7位	(非公表)	
第2位	物質化学工学科4年	山口三佳さん	第8位	物質化学工学科3年	中南琢磨さん
第3位	電子制御工学科4年	阪本靖大さん	第9位	機械工学科5年	小川ジャンカルロさん
第4位	電気工学科1年	木村要一さん	第10位	機械工学科5年	大串蓮さん
第5位	情報工学科5年	島千晴さん	第10位	(非公表)	
第6位	物質化学工学科2年	安養寺伶央さん			

【読書感想文コンクール表彰】

表彰式は1月5日(木)昼休みに校長室にて行われました。



令和4年度

読書感想文コンクールを終えて

第46回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは206編、2年生からは187編、5年生からは1編と、合計394編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員10名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞

物質化学工学科2年 原田 綾音 「普通と違うということ」(「変身」フランツ・カフカ著)

優秀賞

電気工学科1年 石原 春捺 ガネーシャの考え方(「夢をかなえるゾウ」水野敬也著)

電気工学科1年 稲富 里咲 個性の捉え方(「片眼の猿」道尾秀介著)

物質化学工学科1年 奥村 美月 求めた無償の愛―「母性」を読んで―(「母性」湊かなえ著)

佳作

1 M 池尻 大雅	1 M 岡本 優誠	1 M 片山 史孝	1 S 加畑 彩葉
1 S 吉川 敦	1 S 斎藤 琢磨	1 S 山口陽香梨	1 I 佐藤 清正
1 I 永濱 生桐	1 C 近藤 瑞希	1 C 當城 優和	2 M 石田 眞子
2 M 上中 理央	2 E 岩崎 隼士	2 E 永尾 晴翔	2 E 星野 百奈
2 S 安藤耕太郎	2 S 川端 遼	2 S 松井 寿樹	2 I 中辻 美憂
2 C 須摩淵唯人	2 C 藤澤 りの		

《最優秀賞について》

2Cの原田さんは、カフカ『変身』を取り上げています。原田さんの感想文は全体を通して、書くべき内容が厳選されており、また、簡明な文で書かれています。よくまとまった読書感想文と言えるでしょう。

原田さんは、主人公であるザムザの毒虫への変身と、ザムザの家族の態度を通して、「社会からの孤立を恐れる気持ち」と「個性を保つことの大切さ」を読み取っています。社会からの孤立を恐れて「普通」であろうとするザムザの家族と、毒虫という強い「個性」を持つザムザという二つの立場を読み取り、そこから今後の自分自身の生き方について考えを述べています。

同じ本であっても、そこから何を読み取るのか、それも人の「個性」によって変わります。読書体験は自分自身の個性の発見にも役立つことでしょう。様々な経験を通して、周囲との和を保ちながら、周囲に流されない自分の個性を大切にできる人間に成長していきましょう。

《優秀賞について》

1Eの石原さんが読んだ本は水野敬也『夢をかなえるゾウ』です。石原さんは高専入学を機に寮生活を送っているとのこと。親元を離れたことで学び、気づいたこともあったことでしょう。そのような経験があったからこそ、本作に登場するガネーシャの言葉に胸を打たれたところがあったのかもしれません。作品中に出てくるガネーシャの課題の中から、石原さんは特に身近な人との関係のあり方に注目し、自分の行動を見直しています。石原さん自身が「本を読んで終わりにならないように、ガネーシャの課題を意識しながら学校生活を送っていきたいです」と言うように、読書を通して気づいたことや感じたことを実行に移していき、身体性を伴った経験を積み重ねていってほしいと願います。

1Eの稲富さんが読んだ本は、道尾秀介『片眼の猿』です。左眼しか持たない猿の国に生まれた、両目を持つ猿。周囲から容姿を蔑まれた結果、その猿は右眼を潰して周囲と同一化していきます。これがタイトルにもなっている「片眼の猿」の民話です。この民話に対する主人公の言葉から、稲富さんはSNSの普及により、人間の個性（猿の右眼）が失われてきているという実感を抱いたようです。さらに、本作には特徴的な外見を持つ人物が多く登場します。彼らはその外見を個性と捉え、それを強みに変えて生きています。本作のこのような力強さに、稲富さんは勇気をもらったと言います。同じ事柄でも、見方を変えることで世界は大きく変わります。読書を通して視野を広げ、胸を張ってこれからの人生を歩んでいってほしいものです。

1Cの奥村さんが選んだ本は湊かなえ『母性』です。奥村さんは特に作中の母と娘のすれ違いに注目しています。両者ともに相手を思いやって行動するのですが、その行動の意図が相手に伝わりません。この二人が共通して持つ理想の「愛情表現」は、祖母（母の実母）による愛情表現でした。奥村さんは、祖母による愛情表現と、母親による愛情表現とを対置させることにより、なぜ娘が母親からの愛情を感じ取れなかったのかを分析しています。自分なりの解釈を持ちながら作品理解を深めており、母娘間の「愛」のあり方を検討しています。漫然と読むのではなく、問題意識を持って読むことは文献分析の第一歩です。ぜひ今後も継続し、読書を通して思考力や想像力を養っていきましょう。

《全体について》

今回の読書感想文では、読書を通して「個性」や「自分の生き方」を貫くことの大切さを書いているものが多かったように思います。しかし、読書は読んで終わりではありません。読みながら何を考えましたか？どんな発見がありましたか？引っかけるところはありませんでしたか？疑問に思ったことはありませんでしたか？

ぜひ興味と問題意識を持って読書を体験してください。気になった所は別の文献を読んだり、同一作家の別の作品を読んだりしてもよいでしょうね。芋づる式の読書は、読書へのハードルが低くなり、楽しんで読めるきっかけにもなると思います。さまざまな読書体験をした皆さんから、来年はさらなる力作が投稿されることを期待しています。

(国語・松井)

読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

『変身』 フランツ・カフカ 著

普通と違うということ

物質化学工学科2年 原田 綾音

ある朝、ザムザは夢から覚めると、自分が巨大な毒虫に変わっていることに気付いた。つい最近までごく普通のセールスマンであった一人の青年は、一匹の化け物へと「変身」した。しかし、このような「変身」を遂げたのは、彼の容姿だけではない。彼の家族の、彼に対する態度も、以前とは打って変わって、酷く冷たいものへと「変身」してしまったのである。家族からも見放されたザムザは、孤独に死んでいく。その亡骸は、手伝いの婆さんによって片付けられ、家族は晴れ晴れとした気持ちで出掛けるのだった。

この物語の中でザムザは巨大な毒虫、つまり、普通の人とは違う存在として描かれている。ザムザは元々セールスマンで、普通の人であった。普通の存在ではなくなった瞬間、社会から孤立し、家族からも見放されるようになってしまった。私はザムザを哀れに思った。一方で、もし私が彼の家族と同じ立場になったらと考えたとき、私は彼を哀れむどころか、彼の家族と同じような態度をとってしまうだろうとも思った。普通ではないザムザのような存在を受け入れることで、わたしも社会から孤立してしまうのが怖いからだ。社会から孤立し、誰からも見放された先に待っているのは、ザムザのような孤独死である。彼の家族も、同じような恐怖を感じたのだろう。

そこで私は思った。人は社会から孤立することが怖いので、普通であることを望むのだろう、と。もちろん、普通であることより目立つ方が好きだという人も、世の中にはたくさんいるだろう。でも、その目立つ方が好きというのは、あくまでも常識の範囲内で、周りとは極端に違いすぎない程度で、集団の中では少し変わっている方でありたいということではないだろうか。結局人は、社会から孤立しないように、目立ちすぎないよう周りに合わせながら生きているのだと思う。私もそうだ。自分ではNOだと思うことも、周りの雰囲気や飲まれ、YESと言ってしまうことがある。でもこのようにして生きていくと、人としての個性がなくなる。まさに、アイデンティティが失われていくのだ。自分でも本当の自分を見失い、自分自身が他人のように感じる。私はこの物語を読んで、自分の個性が失われつつあることに気付かされた。哀れむべきは、普通ではないザムザではなく、普通であろうとし、必死に周りに合わせて、人としての個性を失っている自分だったのである。

虫になったザムザは、普通ではない。でも、個性を持った存在だと言い換えることもできる。周りとは明らかに違う、自分らしさを持っている。彼の家族や私のような、普通であることを望んでいる人は、社会から孤立することへの恐怖で、彼のような個性を持つ存在を見放してしまう。でも、もしかしたらその恐怖の中には、確立した個性を持つ彼への羨望もあるのかもしれない。

周りに合わせるようにして生きてきた私は、本来の自分が何なのか、今ではよく分からなくなっている。だからこそ、私はもう一度自分らしさについて考えたいと思う。個性を持つことに対する恐怖は、まだある。個性を持つことは、普通とは違う存在であることを意味するからだ。でも、一人の人間として、個性は失わないでいたい。自分しか持っていない個性を見つけ、大事にしていこうと思う。

優秀賞

『夢をかなえるゾウ』 水野敬也 著

ガネーシャの考え方

電気工学科1年 石原 春捺

私は、高等専門学校への入学を機に親元を離れて、寮での生活を始めました。これまでは親から勉強の仕方や日常生活に必要な知識などを教わる機会がありましたが、離れて生活すると自分が何も出来ないことを痛感しました。

自分自身を変えるためにはどうしたらよいだろうかと考えるようになり、インスタグラムなどでよく紹介されている「夢をかなえるゾウ」を読むことにしました。

この本は、平凡なサラリーマンである主人公が、あるときインド旅行みやげで買った神様の置物と同じ形をしたガネーシャと出会い、そのガネーシャが出す課題をこなすことで人生を変えていこうとする物語です。

主人公は、人生や自分自身を変えたいと思い、自己啓発本を読んだり、一人旅をしたりしていましたが、長続きせず、終わっていました。そんな主人公が先輩に誘われたパーティーで成功者と自分の差を目の当たりにして、悔しい思いをしました。そんな自分を変えたいと思った次の日に、主人公の部屋にガネーシャが現れ、ガネーシャからの課題を毎日一つずつこなしながら、人生を変えるために必要なことを学んでいきます。

私はガネーシャから出題される課題29個について読んだときには当たり前のことだと感じていましたが、実際に今の自分を振り返った時には5個も出来ていませんでした。ガネーシャの教えには、トイレを掃除する、まっすぐ帰宅するなどありますが、実家にいたときにはトイレの掃除をしたことがなく、すべて両親がしていました。学校の帰り道も友達と話をしたりして、寄り道をしながら帰宅する日々でした。

夏休みの期間、学生寮が閉まることから、札幌に1か月半戻ることになりました。夏休み前に小指を骨折してしまい、ひとりで移動することが困難な状況になりました。そのようななか、岡山の祖父母が奈良まで迎えに来てくれ、最寄りの空港まで送ってくれました。両親も新千歳空港まで迎えに来てくれましたが、送迎は当たり前のように思っていたことから感謝の気持ちを伝えることはありませんでした。ガネーシャは、

「人間ちゅうのは不思議な生き物でな。自分にとってどうでもええ人には気い遣いよるくせに、一番お世話になった人や一番自分を好きでいてくれる人、つまり、自分にとって一番大切な人を一番ぞんざいに扱うんや。例えば、・・・親や」

と言っています。言われてみると当たり前のように優しくしてくれる両親や祖父母に甘えて大切にしていなかったように感じました。ガネーシャは身近にいる一番大切な人を喜ばせることの大切さを伝えています。

9月に家族で函館に旅行した際に、旧函館区公会堂でハイカラ衣装を着る機会がありました。普段両親が写真を撮る際には、子供の頃と違い、無愛想な感じで応じていましたが、今回は、本を読み、両親を喜ばせるために、一番の笑顔で写真撮影に臨むことにしました。両親の笑顔を見た時に自分も幸せな気持ちになりました。

ガネーシャの課題を通じて、人を幸せにすること、行動すること。この二つをしっかりと行うことで成功した人生を送れるようになっていけると感じました。本を読んで終わりにならないように、ガネーシャの課題を意識しながら学校生活を送っていきたいです。

『片眼の猿』 道尾秀介 著

個性の捉え方

電気工学科1年 稲富 里咲

私がこの本を読もうとしたきっかけは以前同じ著者が書いていた「向日葵の咲かない夏」という本を読んだことがあったからです。その作品は、今まで自分が読んできた中でもトップクラスに印象に残ったもので普段同じ本を繰り返し読まない私でも何回も読む程でした。著者の道尾秀介さんは物語の中に徐々に引きこむような文の書き方をされていて、いい意味で裏切られます。またタイトルの印象の強さも読もうとしたきっかけです。

この物語は盗聴専門の探偵である主人公が同業者の女性をスカウトするところから始まります。主人公が依頼を受けていた楽器メーカーのライバル社で殺人事件が起こりそれをきっかけに主人公の過去、登場人物の違和感など様々なことが分かっていくお話です。

私がこの本を読んで一番印象に残った点は、この本のタイトルである「片眼の猿」についての話がでてきたところです。「片眼の猿」はヨーロッパの民話で、ある猿の国では顔に左眼だけしかありませんでした。しかしある時一匹だけ両眼がある猿が生まれてきました。その猿は国中の仲間に笑われついに自分の右眼をつぶし、他の猿と同化してしまったというお話です。この物語を話しているときに放った主人公の言葉がとても心に残りました。それは「俺はこう思うんだ。猿がつぶしたのは、そいつの自尊心だったんじゃないかって」という言葉と、「自尊心を失くしてしまったら、いずれ心はズブズブに腐ってしまう。そしてそんな心は決まって、悩みの解決を、ある安易な方向に求めてしまう」という言葉です。なぜ私がこの言葉を見て心に残ったかというと昨今SNSの普及により猿でいう右眼、人間で言う個性のようなものが失われてきているように私は感じているからです。SNSが悪いわけではありませんが普及したことにより少なからず画面上に映る人になろうとし、自分の個性を悪だと思い込んでいる人はいると思います。私はこの二つの言葉はそんな人たちに向けたメッセージなのではないかと考えました。個性は生まれてきた時にもらう一つ目の宝物で、それを無くしてしまえば、自分を失う一歩になり得るというメッセージです。周りと違ってそれを持つ者にしかできないことはたくさんある、自信を無くしたとしても簡単に命を落とそうとせず、自分の強みを考え生き抜いていこうと著者は言いたいのではないのでしょうか。現に、主人公は事故で両耳を失っていますし、女の人は一重でいじめにあっていたという過去を持っています。他にも両足を失っている人や鼻を失っている人など様々な人が登場人物として登場します。ですが、全員自分の個性としてそれを受け入れていて自信に満ち溢れています。そんな主人公達を見て私は勇気を貰いました。

私はこの本を読み自分ではいいと思っていない個性でも、それを武器にして強くなれるということを学びました。私は今までコンプレックスを悪いものだと考えていましたが、それと向き合っていくのも良いかなと思えるようになり、世界が広くなったように感じます。皆さんが個性をどのように考えているか分かりません。ですが、それに対し新しい考え方をしてみても良いのではないのでしょうか。

『母性』 湊かなえ 著

求めた無償の愛—「母性」を読んで—

物質化学工学科1年 奥村 美月

私は、11月23日に公開される映画「母性」の原作を読んだ。この物語は母と娘の2つの視点で主に進行していくが、この二人の物事のとらえ方が最大の魅力だと感じた。この親子は同じ出来事を語っているにもかかわらず全く違う語り方をするのだ。その中で、私が特に面白いと思ったところを紹介しようと思う。

それは、この小説の解説としても取り上げられているが、母が表現した娘の表情とその時の娘の心情のくい違いである。母は娘の表情を仏頂面と表現したのに対し、娘はこの時母を心配させないようにと涙をこらえているのである。このシーンは妊娠中の母に代わり家事を行う娘を母が褒めているところで、娘は自分が行う家事に対し、祖母と叔母に文句を言われ辛い思いをする中で、母にかけられた優しい言葉に涙をこらえているのだが、母は褒めるという愛を娘に与えているのにそれを受け取ってもらえないという感情に陥ったのである。この出来事は2人のくい違いのほんの一部でこのような出来事が何度も重なることで母は娘に愛が伝わっていないと勘違いしていた。しかし、また娘の愛も母には伝わっていなかったのだ。娘が母に喜んでもらうために行った愛ある行動はすべて母にとって悪い出来事のきっかけとなっていたのだ。流産をはじめ、友との別れなど母にとって娘の愛は邪魔なものとして扱われ、愛として伝わらなかった。そうしてお互いに愛を受け取ることができずに年月を過ごしてしまうのだ。

では、この二人が求める愛とは何だったのか、それは母の実の母、つまり娘の母方の祖母が与えてくれていたものだった。

祖母は娘に、そして孫にどんな愛を与えていたのか。それはごく普通のものだった。娘には誉め言葉を与え、良いことをすると大人になってからも頭を優しくなでた。孫にも同様に誉め言葉を与え、体に触れることでぬくもりを与えていた。これを孫は「無償の愛」と呼んでいた。しかし、この愛を与えてくれた祖母はすぐに亡くなってしまった。では、祖母が与える「無償の愛」と母の愛は何が違ったのか、これは私の解釈にすぎないが母の愛には愛よりも先にその目的があったのではないかと思う。「～のために。」「～と思われぬように。」と。娘は祖母の愛について「あなたがいるだけでいい」と思わせるとも表現していた。おそらく母の愛よりも前にある目的が無償の愛を消してしまい、自分がいることに対し理由を求められているように感じ、無償の愛と感じられなかったのではないだろうか。

ところで、ここまでは母と娘の「愛」について感想を述べたが、最後にここで物語の題名でもある「母性」について感じたことを書こうと思う。この物語を読んだ最大の理由がこの「母性」について知りたかったからなのだ。

作中で母性とは「自分が求めたものを我が子にも捧げたいと思う気持ち」と表されている。物語の中では確かにこれが成り立つと感じたが、今一度自分の思う母性について考えたとき、真逆の考えが浮かんだ。母性とは「母から受けた愛を娘に与える」ということではないか。私の母は優しさと厳しさを平等に与えてくれる人だった。祖母を見ても同じことを感じる。物語中の母もこれをしようとしたのではないかと思う。しかし伝え方を間違えて、うまく伝わらなかったのだろう。私の母は先日亡くなりもう二度と母性を受け取ることはないが私に娘ができたなら母から与えられた母性を娘に上手く与えようと強く思った。

学生図書委員会 活動報告ほか

本の世界について ～一抹の懺悔を添えて～

図書委員会委員長 情報工学科4年 石村 涼介

はじめまして。2022年度図書委員会委員長の石村です。

皆さんは「本の魅力」と言われて何を思い浮かべますか？語彙力や文章力が向上することでしょうか。それとも新しい知識が身につくことでしょうか。

確かにこれらは大きなメリットです。しかし、私は「本の数だけ世界が広がっていること」こそが最大の魅力だと考えています。

本には著者の想いや考えが詰まっています。そしてそれが色褪せることはありません。何百年も前に遠い国の誰かが伝えたかったことに、本の世界を通じて触れることができるのです。いえ、触れるだけではありません。作者や登場人物に感情移入することで、世界を体験することだって可能です。本を手に取り想像力を働かせれば、私達はいつでもどこにでも行けて誰にでもなれるのです。

以上のことは、何も小説や自伝などに限った話ではありません。我々高専生が普段使っている専門書だって同じです。専門書の世界は複雑で、世界を旅する読者は何度も打ちのめされます。しかし、著者は伝えたいという想いを込めて執筆しているため、その人間らしい部分が垣間見ることがあります。例えば、難解な解説の中に誤字を見つけると、高名な先生でもミスをするんだなど可愛く思えてきませんか？皆さんもこのような少し癒されるオアシスを楽しみながら専門書の世界を旅してみたいかがでしょう。

さて、以上を踏まえて図書館の話題に移りましょう。本の数だけ世界があるならば、大量の蔵書がある図書館はいわば異世界への扉です。その扉を無料で何度でも開けるわけですから、これを使わない手はないでしょう。また、欲しい本が図書館に無い場合はブックハンティングや希望図書の制度があります。積極的に利用してください。

ここまで読んでくださった物好きな方へのメッセージです。実は、上で偉そうに語っている私は去年2、3冊しか趣味の本を読んでいません。さらに、図書委員会に入った理由も委員長になった理由も「なんだか面白そうだから」です。この場を借りて懺悔させてください。ただ、本との出会いもこういったふとした事がきっかけだと思います。ぜひ軽い気持ちで図書委員になって軽い気持ちで本に出会ってください。飛び込んでみると案外楽しいですよ。

最後になりますが、こんな委員長を支えてくださった先生方と幹部の方々、そして委員のみなさん、ありがとうございました。



学生図書委員会作成 図書館紹介動画

図書館ホームページでは、学生図書委員会が作成した図書館紹介動画を公開しています。自動貸出返却機の使い方などが説明されています。
<https://www.nara-k.ac.jp/nnect-library/guide/introduction/>



「私」にとっての図書館とは

情報工学科3年 村上 拓也

皆さんこんにちは。本年度、図書委員会の会計を担当している村上拓也です。

私は1年生のころから図書委員会で活動させていただく機会があり、図書委員の一員として様々なプロジェクトに参加させていただくことができました。その中でこんなことを思いました。

「本に興味がなさ過ぎなのでは？」

各クラスでも連絡されているとは思いますが、図書委員会では年に2回、ブックハンティングというものを行っています。このブックハンティングでは、各クラス内で希望の図書を各クラスで割り当てられた予算内であれば、自由に選書し、学内の図書館に所蔵されます。1,2年生の皆さんはまだ専門のレポートも、高学年のもの比べると簡単なものかとは思いますが、高学年になるにつれて実験の内容が難しくなっていると私自身も実感しています。

今の時代、インターネットが普及しており、高専に入学している方の大半はパソコンを持っていることもあり、参考文献もインターネット上で検索している方も少なくないと思います。しかし、これにはデメリットもあります。

多種多様なことがインターネットで知ることができる時代ですが、インターネットで調べた内容が必ずしも正しい保証はありません。それに比べて、専門書などでは大抵、著書の中に参考文献が引用されており、この情報のソースはここ！と、わかるようになっていきます。そのため私は、インターネット上で調べた情報と比べると確実性が高いのではないかと考えています。

本校の図書館には、よくあるような文庫本や、小説だけでなく、各学科に関連する専門書や、過去の卒業生の方々が書いた卒業論文など、数多くの蔵書があります。そのため、これについて勉強したいけど参考書買うのも高いし、と思う方は図書館に是非立ち寄っていただきたいです。求めている本が実は高専の図書館内にあって、参考書を買う必要なく勉強できる、といったこともあります。

最後に、私にとって図書館とは、実験や、情報工学科であればプログラミングの参考書など、学校の授業や課題、レポートだけでなく、TOEICや各種資格試験など、私自身勉強したい内容についての教材など、公営の図書館にはない、高専だからこそその図書館だと考えています。皆さんもこれを機に是非図書館を活用してもらえたらいいな、と思います。

最後まで目を通していただきありがとうございました！

図書館だよりの表紙絵について

図書館だよりの表紙絵は、美術の授業の作品で教員から推薦された中から、教育支援センター運営委員会での投票により選出しています。

ホームページでは、候補作も含めすべての作品がご覧になれます。

<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/publication/librarynews/>



三日間の幸福 三秋 穂著

電気工学科5年 松川 大晟

皆さんこんにちは。図書委員会書記の松川です。図書館だよりを書くこととなった訳ですが、これまでこのようなものを書いたこともなく途方に暮れています。なので、筆が進みそうな私の好きな小説「三日間の幸福」について紹介しようと思う。

主人公クスノキは少年時代ほかの人とは違い優秀な大人になると考えていた。しかし、20歳となり、少年時代の理想とかけ離れていた。人生に希望を見いだせず、金欠であったクスノキは「寿命を買い取ってくれる店」で寿命を売り払い、監視員がつくことになった。仕事とはいえ同年代の女性がいる奇妙な共同生活。主人公は残りの時間を価値のあるものにしようと試みるが果たして・・・

誰しも1度はこのようなことを考えたことがあるだろう。「自分の人生に値段をつけるなら何円だろう。」と。本作品は「命の価値」について非情に、かつ優しく書かれている。序章にて主人公が寿命を売り払うシーンから始まることから、死に対して意識させるとともに物語を通じて暗い雰囲気 연출し、読者は世界に引き込まれていく。しかし、読み終わる時にはネガティブな気持ちではなく、前を向いて歩いていこうと思える。

生きることにしてお金は必要不可欠であり、非常に魅力的なものだ。しかし、そればかり追い求めることが人生に豊かさを与えるとは言い切れない。陳腐な言い回しになるが、人を愛し愛される、それはとても素敵なことで周囲にも幸せを与えることが出来る。長い人生を生きるのなら、自分だけでなく人に幸せを与えることが出来るようにしていきたい。



ブックハンティングについて

学生図書委員会の特に大きなイベントです。

年2回、各クラスで購入希望図書を募り、その図書を大阪の大型書店で購入する活動ですが、コロナ禍においてはオンラインで実施しています。1階奥にコーナーがあります。

近鉄奈良線：街と駅の1世紀：懐かしい沿線写真で訪ねる： 近鉄奈良線 各駅今昔散歩 大正・昭和の街角を紹介

藤原 浩著 情報工学科4年 川城 聖矢

近鉄奈良線、それは100年以上の歴史が詰まった近鉄の代表的な路線の一つである。この本には歴史ある奈良線を中心に生駒線、けいはんな線、生駒ケーブルの歴史が綴られている。100年という長い月日もあり、現在と違う点が多く存在する奈良線。そのほとんどが今昔の写真とともに書かれている。私が特に気になった点は近鉄奈良と生駒～石切の区間である。どちらもこの本を読んで初めて知った。

まず近鉄奈良付近についてである。この駅は現在、地下駅となっているが1969年頃までは地上駅であったのである。驚いた点はそこだけではない。なんと近鉄奈良駅のあたりは併用軌道であった。併用軌道とは路面電車のように道路上を電車が走ることを言う。つまり電車と車や人が並走していた時代があったのだ。昔は奈良の中心部の地上に電車が走っていた、しかも路面電車のような方式で、である。

もう一つの生駒～石切についてだが、この路線もなかなか面白い歴史を持っている。現在のトンネルは奈良線の輸送力を上げるために大型車を投入する時に旧トンネルは通れないために作られた2代目である。それまでは現在は使われていないトンネルを使っていた。それは旧生駒トンネルと呼ばれるトンネルであった。旧トンネルは近鉄の前身となる大阪電気軌道が開通させた。しかしこのトンネルを開通させるためには涙ぐましい努力があった。トンネル工事には落盤事故や湧水などが発生し、当初の予算よりも工費がかかってしまった。故に鉄道会社、トンネルを掘った会社ともにしばらくは経営難に陥ったという。それでも手抜き工事はなく良質なトンネルであったようだ。

その他にも読んでいてあっと驚かされるような事が多く載っていた。例えば、大阪方の終点についてである。現在奈良線は近鉄奈良～大阪難波のことを指すことが多い。実際この区間で完結する電車がかなりある。だが開業当初は難波ではなく上本町までの運転となっていた。

普段の生活で使っている路線だが、多くのドラマを知る事ができたり、時代背景を知ったりする事ができた良い一冊だった。長い歴史を背負ったものは意外と近くにあると感じられた。

編集後記

図書館だより第80号に執筆いただいた皆様、ご寄稿ありがとうございました。今号からPDFによるWEB掲載のみの発行とさせて頂いております。図書館は、今年度もコロナ禍のため利用が制限され、ご不便をおかけしておりますが、どうかご理解のほどよろしく申し上げます。



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/>

National Institute of Technology, KOSSEN, Nara College

科学道100冊



科学道100冊とは国立研究開発法人理化学研究所等のプロジェクトにより毎年選ばれる図書です。今年度、後援会より新たに追贈されました。全て1階奥にラインアップしています。